



© Yuki Nakase

オアフ島ノースショアにて

いつの日か月面着陸

アポロ11号の月面着陸と無事生還から今年で50年というニュースは、この夏アメリカのメディアで大きく取り上げられていました。「月面はアメリカ合衆国南西部の砂漠のようだけど、これは劇的に美しい砂漠だ」と、人類初月面に降り立った宇宙飛行士ニール・アームストロング船長が話しているビデオを見ました。アポロ11号から全世界にテレビ同時中継された月面に降り立つ様子や、宇宙から見た青く輝く小さな惑星地球の映像を、街頭のブラウン管にかじりつくように見入る50年前の世界中の人々の表情もとても印象的でした。インターネットにより個人で好きな時間に好きなコンテンツを選んで視聴できる現代とは少し違う、人種を超えた連帯感のような感動を50年前の映像から感じます。あの頃は、「2020年までには民間人が月に旅行できるかも」などと本気で夢見ていた人も少なくなかったと思いますが、結局アポロ11号の任務を遂行したアームストロング船長とバズ・オールドリン月着陸船操縦士、そしてマイケル・コリンズ司令船操縦士を含め、月面に降り立った人類は未だに十人にも達しません。50年という月日が経っても、彼らの体験は彼らだけが共有するまだまだ未知の世界です。

日本では昔から「百聞は一見に如かず」と言われてきましたが、現代では「百時間のネットサーフィン一回の体験に如かず」と言った方が馴染むかもしれません。例えば、どれだけ高性能なネット上のヴァーチャリアリティーも、飛行士たちが見た暗闇の宇宙に浮かぶ月越しの地球360度ビューには敵わないでしょう。なぜなら、視覚的にはカメラのレンズが捉える光と人間の目が捉える光が完全に同じではない上、たとえ五感すべてを再現・再生することが可能だとしても、個々の再生手段によって提供できる情報に差が生じる可能性を無視できず、さらにメディアには必ず他者の視点と演出が舞台裏に隠れているからです。インターネットで得られる情報が多くなればなるほど、実際に体験することがどんなに貴重で、その体験から得られる情報の豊か

さを痛感します。

上の写真は、先日ハワイを訪れた際に友人宅で見たお面です。その友人はオアフ島ノースショアのワイメア滝のあるワイメア溪谷公園に長く勤めていただけあって、彼の裏庭そのものも植物園のようです。裏庭と一緒に歩きながら、彼が一本一本大切に育てている木々の説明をしてくれました。その後、皆でワイキキに戻る道中も彼のガイドは続きます。火山灰からできた赤土に植えられたたくさんのコーヒーの木の向こうの高い山を見ながら、彼は「あの山の向こうがパールハーバで、日本軍はこの山の手前から攻めたから死角だった」と、78年前の真珠湾攻撃をまるで昨年植えたバナナの木に実がなった出来事のように話しました。その車中、日本人は私一人だけで言葉に詰まりました。気まずい沈黙の後、何か言わなきゃと出た言葉は、「あなたの家族や親戚に、あの攻撃による被害者はいましたか」という質問です。彼らの家族は第二次大戦後サーフンのためにカリフォルニアからハワイに移住してきたという話を聞き、私は一言「そうか、よかった」とだけ言いました。これまでノースショアには何度も訪れていてあの山のある景色をいつも素通りしていましたが、この会話があつた山の見え方を変えたのは言うまでもありません。

実際に体験することにより得られる情報は、どんな文献と画像資料にも勝るでしょう。また、「りんご」と言う言葉を聞いて想像する物と「an apple」と言う言葉を聞いて想像する物に違いがあるように、私の脳は私に提供する世界を言語とそれまでの経験値で処理していることは明らかです。言葉の視覚表現化も重要な役割の一つである照明係として私がなすべきことは、言葉の勉強を怠らないこと、立場を変えた体験から感じることに敏感であること、時間とフタコが許す限り実際に足を運ぶこと、かもしれません。私が自身の仕事の出来に満足できる日は、いつか月に旅行できる日が来るかもと想像するほど、遠い未来のように感じます。